The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	つながりあい、他者を支える : ナイロビのスラムに息づく共生の基本
Author(s)	澤村, 信英
Citation	未来共生学. 2016, 3, p. 456-461
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56237
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

エッセイ

つながりあい、他者を支える

ナイロビのスラムに息づく共生の基本

澤村 信英
大阪大学大学院人間科学研究科教授

ケニアの首都ナイロビは標高1800メートルの高地にあり、年間を通じて冷涼な気候である。多くの日本人に見られる共通の誤解は、赤道直下の国であるため、さぞ暑いだろうと思うことである。日本の盛夏である7月は、1年で最も寒い時期で、日中の最高気温が20度前後、夜間は5度程度まで下がることもある。ケニアをはじめとするアフリカ諸国に関するこの種の誤解は、のどかな勘違いである。

私が初めて訪問したアフリカの国はケニアであった。青年海外協力隊員としてマラウイに赴任する途中であり、ナイロビに到着したのは、忘れもしない1982年10月のことである。それまで、ヨーロッパやアメリカに行ったこともなく、パキスタンのカラチから到着したナイロビの印象は、この上なく良かった。近代的な高層ビルが立ち並び（写真1）、街並みは整然とし、食事は美味しかった。何よりも、カラチでは通じなかった私の英語を正確に理解してくれ、ケニア人の話す英語もわかり易かった。アジアではあまり元気が出なかったが、アフリカとは妙に水があった。

こういう旅行者気分の青年にとっては、このナイロビに10か所のスラムがあり、その人口の6割がこのような地区で居住していることなど知る由もないことである。想像力の欠如とはこういうことなのか、スラムとは別世界のことであり、貧困や格差の問題に特別な関心もなかったのかもしれない。さらに、今のようにインターネット

写真1.　高層ビルが立ち並ぶナイロビ中心部

で必要な情報が瞬時に検索できる時代でもないので、現場に行かない限り、現実を知ることができなかった。

ケニアで教育研究を始めたのは、大学に職を得て数年が経過した2000年からである。アフリカに関心があったとはいえ、まったくの偶然である。最初に選んだフィールドは、マサイの人びとが住むナロックである。アフリカで教育研究をする日本の研究者もほとんどいなかった。伝統的な社会の中で学校教育はどのように受容されていくのか、そんなことに関心をもって研究を始めた。ナイロビから車で2時間程の公立小学校をベースにして、教員宿舎に泊まらせてもらいながら研究を進めた。日本のメディアでは「マサイ族」として紹介され、伝統的な衣装に身を包み、伝統的な生活を送っていると想像するかもしれないが、多くのマサイの子どもたちは制服を着て、学校に通っている。

ナロックの調査では、本当に数多くのことを学ばせてもらった。研究者としての私をこれまで育ててくれたのが、この地域で働く教師や生徒、そこで生活する人びとであることは間違いない。15年間以上にわたり、毎年1～2回、学生も加わって、調査をしてきた。アフリカの教師の資質については、関連の論文や報告書を読むと、概して評判が悪い。給与が安く、モチベーションが低く、教え方が教

師中心で一方的であるなど、散々である。

私の出会った教師もそのような一般的な評価とさほど違わないと感じていた。色眼鏡で見ていたのかもしれないが、一部の例外的な教師を除けば、そんなに子どものことを考えて行動しているようには思えなかった。その理由は、教師の権威主義的な態度と行動という、外から見えることばかりに注意を払っていたからかもしれない。今から考えれば、私の質問の仕方が適切ではなかったのだろう。教育上の課題ばかりを聞いていたような気がする。それに対して、多くの教師は、私が喜ぶような問題を並べて親切に教えてくれた。今から振り返れば、必ずしも正確ではない理解と解釈をしていたところもあった。

それが、毎年同じ学校に通い、先生方と個人的な付き合いを始めると、物事を素直に深く観察できるようになった。素直というよりは、共感が芽生えてきたと言って良いかもしれない。よくこの厳しい環境で生活し、毎日早朝から夜遅くまで働いていると、敬意の気持ちをもつようになった。干ばつが頻繁に起こり、そこで生活するために、水の確保をするだけでも大変な努力が必要である。別に教師の生活や職場環境が変わったわけではなく、研究者である私の立ち位置が変わっただけなのである。そうすると、同じ現象が起こっていても見え方はずいぶん変わってくる。

そろそろ本題のスラムの話に戻ると、初めてナイロビのキベラ（写真2）を訪れたのは、2010年9月のことである。キベラ・スラムはアフリカ最大の都市スラムと言われており、50 ～ 80万人が住んでいると推測されている。あるケニアのNGOが、キベラでHIVエイズの啓発活動を実施するということで行くことになった。訪れた場所は、人通りの多い、スラムの入り口付近の広場であった。スラムというイメージとは程遠く、普通の場所であった。このNGOによる住民に対する啓発活動は、セミナーでも開催するのかと思っていたが、プロの演劇グループによるパフォーマンス仕立てになっており、誰もが関心を持てるよう、実によく工夫されていた。

写真2. ナイロビ中心部に近接するキベラ・スラム

スラムで研究を始めることが可能となったきっかけは、その時に近くの道端で干し魚を売っていた婦人と知り合いになったことである。ビクトリア湖に近い土地で生まれ、中等学校2年で中途退学しているが、英語をよくしゃべり、その話し方から聡明さがよくわかった。この彼女と今もつながりあえるのは、携帯電話の発達のおかげである。彼女は40歳で子どもが6人いる。そして、子どもの一人が通っている学校をちょっとした好奇心から2014年9月に訪問した。政府に認可されていない、いわゆる低学費私立校であった。

この学校は、私の想像よりはるかに立派であった。授業がしっかり行われ、教室の壁には教師自作による図表が貼られている。これまで調査してきたナロックの公立校に比べても、学習の場としての雰囲気が強かった。外部からの支援もほとんどなく、保護者から徴収する授業料によって経営が成り立っている。政府の支援なく自立的に運営している学校において、教育の質が公立校より高いということは、冗談にもならない事実である。なぜこのような学校経営が可能となるのか、ますます関心が高まるばかりであった。

キベラの学校の全体像については、あるNGOにより最近行われた調査データがネット上で公開されている。その学校別データを精査していくと、キベラ・スラム内には少なくとも92校の小学校があることがわかった。「スラム」を辞書で引くと「都市で貧しい人々が集

まって住んでいる区域」「貧民街」と書かれていることが多い。決して間違いではないが、これだけの学校が人びとにより自主的に運営され、排水などの衛生面での問題は大きいが、電気もあり、トタン屋根の横からテレビのアンテナが立っている家も多い。

このスラムで研究を本格的に始めるようになったのは、2015年2月のことである。このような学校の経営者や教師との出会いがなければ、このエッセイを書くことはなかったと思う。ここで働く教師は、さまざまな意味で公立校の教師と違っていた。その衝撃が現在の私の研究に対するパッションでもある。ナロックやナイロビの公立校でよく耳にしてきた教師の反応と明らかに違うのである。献身的に子どものことを心配する教師が圧倒的に多く、教師としての使命感がある。同じようにキベラで暮らし、厳しい生活を送ってきているので、生徒の苦境に共感する部分も多いのだろう。公立小学校の教師の給与は、月額最低18,000シリング（約180米ドル）であるのに対して、この学校の給与は6,000シリング程度である。しかし、その薄給を嘆くのではなく、職住接近で通勤の交通費がかからない、食事は朝昼とも学校で提供を受けるので夕食だけで済むなど、常に考え方がポジティブなのである。

そして、何よりも子どもやその家族の役に立つことが働くモチベーションになっているという。このようなことが質の高い教育を提供できる理由でもあろう。教師としてのやりがいを感じ、子どもの将来を案じ、支えることを当然の役割として話してくれる。学校が人びとをつなげる結節点として機能していることがわかる。さらに、将来も教師として働きたいという者が大半である。そのために、教員養成校や大学にパートタイム学生として通学していたり、進学する計画を持ち、政府雇用の教員になることを目指している。

生徒にしても、普通の公立校の子どもとは、仕事に対する意識が少し違う。スラムの小学校で生徒に将来の仕事を尋ねると、スラムを良くしたい、そこに住む人びとのために働きたい、という意見が特に男子において驚くほど大勢を占める。このことが中等学校、大学への進学の理由にもなっている。これまでの公立校では、もっと自身や家族のために安定した高給が望める仕事を挙げる子どもが多いのと対照的である。また、普通であれば、道行く子どもたちはわれわれ外人を見て「ギブミーマネー」と手を出してくるところであるが、このスラムに暮らし、小学校の制服を着ている子どもは、丁寧に挨拶をして通り過ぎるのである。都市でありながら人びとがつながりあい、コミュニティがしっかりしているのであろう。

財政面での学校運営においても驚いたことがある。この無認可私立校は、授業料収入に依存した財務運営を行っているが、生徒から一律に徴収できているわけではない。授業料全額を納入する保護者は全体の4割程度で、3割が全く払わず、残りの3割はその時々で可能な額を支払うという。遺児や経済的に困窮する家庭も多く、支払うよう保護者に督促は行われるが、未払いにより子どもを追い返すことはない。貧困層にある人びとがつながりあい、最貧困層の人びとを支援する隠れた制度が機能しているのである。相互扶助の考え方がごく自然に根付いているのだろう。

この学校が持続的に発展しているのは、第一に経営者の人間性とリーダーシップによるところが大きい。大柄な人物で、全教師が彼を慕い、尊敬、信頼しており、保護者がこの学校を選んで子どもを送る理由は、教育の質が高いという認識に加え、子どもと保護者に敬意を払ってくれることだという。その根底には、同じような境遇にあった経営者をはじめとする教職員の経験に基づく、相手の苦境に対する理解と共感があるように思える。また、学校の構成員に連帯感があることを関係者が理解し、誇りにも思い、そのことは教師自身が働くことの動機づけでもある。

スラムに暮らす人びとから学んだことは、生活の苦しい人びとにとっては、共生しなければ自らの生存が脅かされるという、特別なことではない社会の規範である。そして、つながりあい、他者を支えるという行為は、自らを支えることでもあり、共生社会における生活の基本であることを再認識させられた。